

【令和2年度航空研究センターシンポジウム（7月17日実施）：発表1】

軍事作戦の変遷と今後の展望について

防衛研究所戦史研究センター長
石津 朋之

はじめに

今日私は、歴史家の観点から社会の在り方と戦争の様相の変化、つまり社会の変化が戦争をどのように変え、戦争の様相の変化が所要の軍事力、武器をどう変えていったかという問題意識でお話をさせていただきたいと思います。

社会の変化が戦争を変えるというのはあたりまえのことですが、実は、私自身を含めてそれを理解、認識するには結構時間がかかります。逆に人間は自分が理解しているよりも共通認識等に縛られ、社会の変化になかなか認識が追いついていかないものです。特に今日は社会の変化がものすごく早いものですから、一層人間の認識がついていかず新しいものはなかなかできません。これは、新しいものを作っても、それをどのように活用すべきなのか作った本人も分からないということがあるからです。

今日の発表の要旨は、21世紀の社会は、おそらくヨーロッパの中世や近世のような方向に流れて行っているのではないだろうかということです。また、21世紀の社会を理解するキーワードがグローバリゼーションと予防（先制）原則であるということもご紹介したいと思います。

1 「時代精神」としてのグローバリゼーション

「時代精神」という難しい言葉をあえて私は使っておりますが、21世紀を紐解く鍵として、グローバリゼーションとは何かと言いますと、これはいろいろな議論がありますが、ここではあまり深く入るつもりはありません。基本的に

この概念は、主権国家の相対化と理解していただければと思います。

我々は主権国家体制の中で生きております。主権国家は暴力を独占していますが、理屈のうえでは基本的に、この暴力を対内的には警察力と呼び、対外的には軍事力と呼びます。主権国家がどうもあやしくなっているということは、この理解がやや曖昧になっているということであると思います。これがグローバリゼーションの意味するところの1点目です。

そして2点目は、国境の概念がぼやけてきているということであると思います。たとえば今までは、対内的には警察が使用され、対外的には軍隊が使用されていましたが、今ではその区別がぼやけています。このことは、3点目の戦闘空間の「グローバリゼーション」とも関連します。

昔は、技術的な意味で戦闘領域を一つに結び付けることが難しかったため、軍事力は陸・海・空の軍種に分けられていましたが、技術的發展があり、従来ばらばらに行ってきた軍事力の使用を今では一つにまとめることが可能になっています。ですから今、軍事力の一体化等いろいろな話が出てきていますが、これは軍事上必然的な話なのです。そして、軍事力と警察力の一体化（統合化）の話や両者の区別が曖昧になったということも当然の話です。そもそも、主権国家体制の中で暴力が軍事力と警察力に分かれていったものですから、主権国家体制が揺らいでいる今日においてその区別もファジーになってきているのです。以上、グローバリゼーションの意味するところについて簡単にご説明させていただきました。

次に「新しい戦争」の様相について簡単に申し上げます。実はこの議論は以前からあり、書籍もいくつかありますのでそれを紹介したいと思います。『戦争の変遷』（マーチン・ファン・クレフェルト）、『超限戦』（喬良、王湘穗）、『軍事力の効用』（ルパート・スミス）という本です。これらは全て日本語訳されていますので読んでいただければと思います。

この中でも喬良と王湘穗の2人が書いた『超限戦』は、発売された当初、刺激的なものがありました。一時期、「戦争以外の軍事活動（Military Operations other than War: MOOTW）」という言葉が流行したことがあります。この本は次の新たな概念として「軍事以外の戦争活動」（これは私の造語ですが）というものを提唱しました。今日、これはハイブリッド戦争という言葉で理解されるようになりました。また、この本の中で言及されております平時と戦時の曖昧化ということも、最近ではグレーゾーンという言葉で呼ばれております。

このように「新しい戦争」の様相に関するさまざまな概念は、20年、30年前

から言われておりましたが、我々の認識が追いついていませんでした。仮に認識が追いついていたとしても、組織というものはそう簡単に変化するものではありませんから浸透するのに現在まで時間を要したのです。

2 「時代精神」としての予防（先制）原則

次に、21世紀の社会を理解するもう一つの鍵として、先制（予防）原則という概念を挙げさせていただきます。元々、「先制（preemption）」という概念と「予防（prevention）」という概念は似て非なるものです。「先制」は国際法では合法の概念であり、「予防」（あるいは予防戦争）は違法な概念なのですが混同して使われております。

9.11 アメリカ同時多発テロ事件以降、戦略環境の変化とアメリカの政策転換に伴い、「先制」の意味するところが変化し、限りなく「予防」に近い「先制」概念が登場しました。この「先制」概念が登場した背景にあるのが、次に説明する「リスク社会」です。

3 今日のリスク社会における予防（先制）原則の受容

今日は、しばしばリスク社会と言われます。リスク社会とは、敵がいるようでない状況、つまり、冷戦時のように明確な脅威がない一方で安全に暮らせるわけではないというような社会です。そうしたリスク社会の中で登場した概念が予防（先制）原則です。この原則を分かりやすく言うと、「手遅れにならないうちに」という意味になります。この原則を軍事が担う安全保障（security）の分野に導入することは容易であり、まさに時代精神と言えるでしょう。

元来、「手遅れにならないうちに」という考え方は、いわゆる環境派に由来します。彼らは、地球温暖化や森林破壊といった地球規模の異変に取り組んできました。こうした問題には、何らかの関係があるものの因果関係が100%証明できない場合もあります。環境問題を重視する人々は、因果関係の証明まで行動を保留して深刻な事態を招くことの是非を長らく議論してきたのです。

この概念を軍事に持ち込んだのは、ネオコンの人たちです。イラク戦争の際、イラクが大量破壊兵器を持っているのではないかという疑惑がありました。彼らは、大量破壊兵器が周辺国に拡散するという深刻な事態を懸念し、それを未然に防止するため疑惑の客観的証明を待たずに先に攻撃しようという発想を持っていました。最近では、公害問題、自然災害、犯罪の問題、学校でのいじめの問題、そして企業のコンプライアンス問題等においてもこのような考え方

があります。社会全体が、手遅れになってはいけない、つまり、直ちに何らかの行動をとるべきという方向になっているように思います。

軍事力に関して言えば、従来は基本的に最後の手段と位置付けられてきましたが、最近では手遅れになってはいけないという考え方の下、一番後ろにあった軍事力がぐっと前に出てきて最初的手段と位置付けられるようになりました。また、戦争がリスク管理とイコールになったとも指摘されています。この意味は、従来、リスクはあるが疑わしいだけで具体的な脅威がない場合には軍事力は使用されませんでした。今では最初から用いられる流れにあるということです。これを良い方向と見るか、危うい方向と見るかは、見る人の立場によって異なるであろうと思います。とはいえ、おそらく、軍事力は頻繁に使用されていくでしょう。

4 21世紀の社会と戦争の様相

21世紀の社会に関して最初に言ったことをおさらいしますと、20世紀冷戦は「長い平和」でしたが、21世紀は「長い戦争」の時代であるとともに、新しいヨーロッパ「中世」、「近世」でもあります。近代以降、我々は主権国家のみを国際政治の主体として認識してきましたが、中世や近世では、宗教的権威のような国家主体が曖昧な形で存在し、その下に神聖ローマ帝国等があり、さらにその下に君主その他さまざまな主体が混在していました。おそらく、21世紀も主権国家が全てではないという時代といえるでしょう。主権国家による暴力の独占が崩れ、山賊、海賊等さまざまな武装集団が次々に登場することに対して国家がどう対応するのかというのは難しい問題です。

次に、21世紀の戦争の様相として、戦争の民営化や、子供、女性、老人が戦争にある意味入って来やすくなったということを挙げておきます。昔の戦争は、男性の戦闘員から成る正規軍が戦うものでした。我々が認識している典型的な戦争もそのようなものでしょう。しかし現実にはさらに先へ進んでいますから、我々には一生懸命現実に追いつき認識を新たにしていけることが必要とされています。

おわりに—「空間革命」について

最後に、今は、おそらく我々が認識を大きく変えなければいけないときであるということ、つまり、新たな「空間革命」が生起しているということに言及したいと思います。この空間革命が生起している分かりやすい領域が、サイバ

一空間や宇宙空間です。空間革命に伴い、政治が決断する時間が入る余地がなくなっているとして、クラウゼヴィッツ的な戦争観の妥当性を問う立場もあります。政治の手段として戦争を捉えることは今後難しいのではないのでしょうか。しかし結局、人はクラウゼヴィッツ的な戦争観にいまだに固執しており、最終的には政治が判断するであろうと考えているように思います。

ただ、私はあまり悲観しておりません。実際、核兵器が出てきた時も同様に、核を契機とした戦争観の変化、政治的決断に関する議論がありました。当時も我々は一生懸命理論や概念を積み上げてきました。こうした努力はさまざまな新たな問題へのアプローチの基礎となっています。

現代も同様に、一つ一つ理論や概念を積み上げて仕組を作っていくことが必要とされています。おそらく航空研究センターや防衛研究所はそういうことを求められているのであろうと思います。